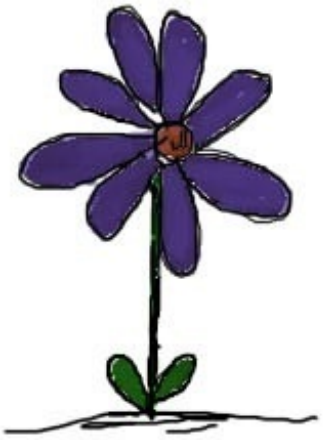
THE MAIL DELIVERY OF CRAZING BOY

BY NIJEMAS

一番最初の話。

世界は真っ白から始まりました。



いつしか花が咲きました。

にょきにょき目玉が伸びてきて…

とうとう足が生えて歩き出しました。

The mail delivery of crazing boy

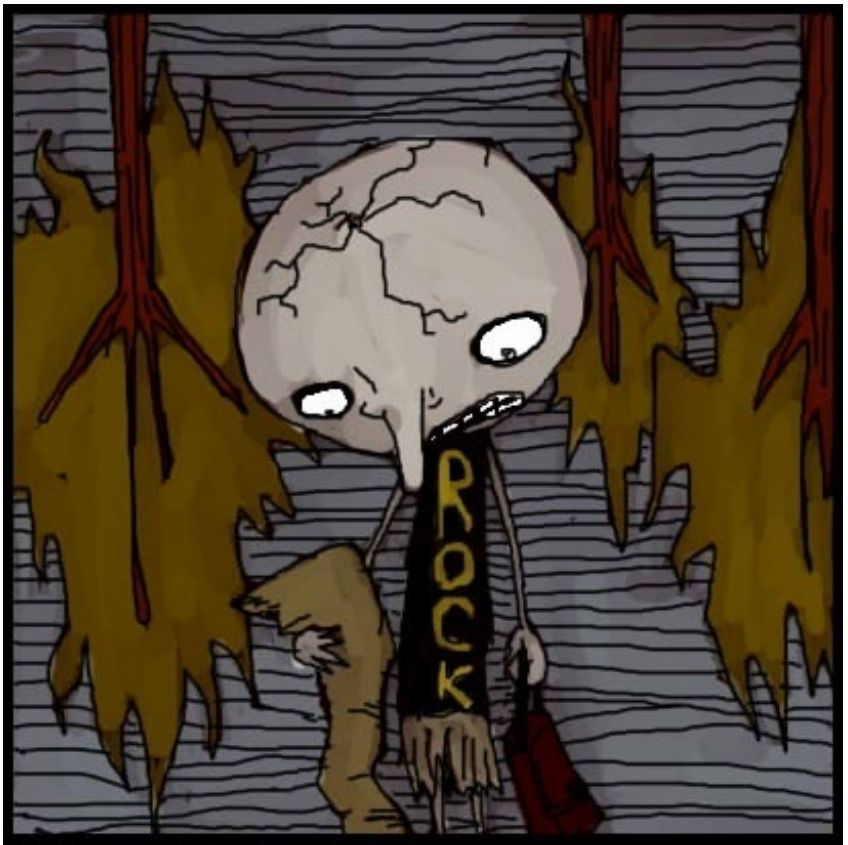
ある村に、ある一人の少年がいました。
少年は、世の中にたくさんの違和感を
感じていました。
そして、それと同じくらい、少年の頭には
たくさんの ひびが入っていました。

少年は親戚のおじさんの家で暮らしていました。
両親がいないからです。
母親は少年を産むと、そのまま亡くなりました。
父親は、通り魔に殺されてしまいました。
犯人は、一度は捕まったようですが、
なんだか難しい理由で、
数ケ月で自由になったようでした。

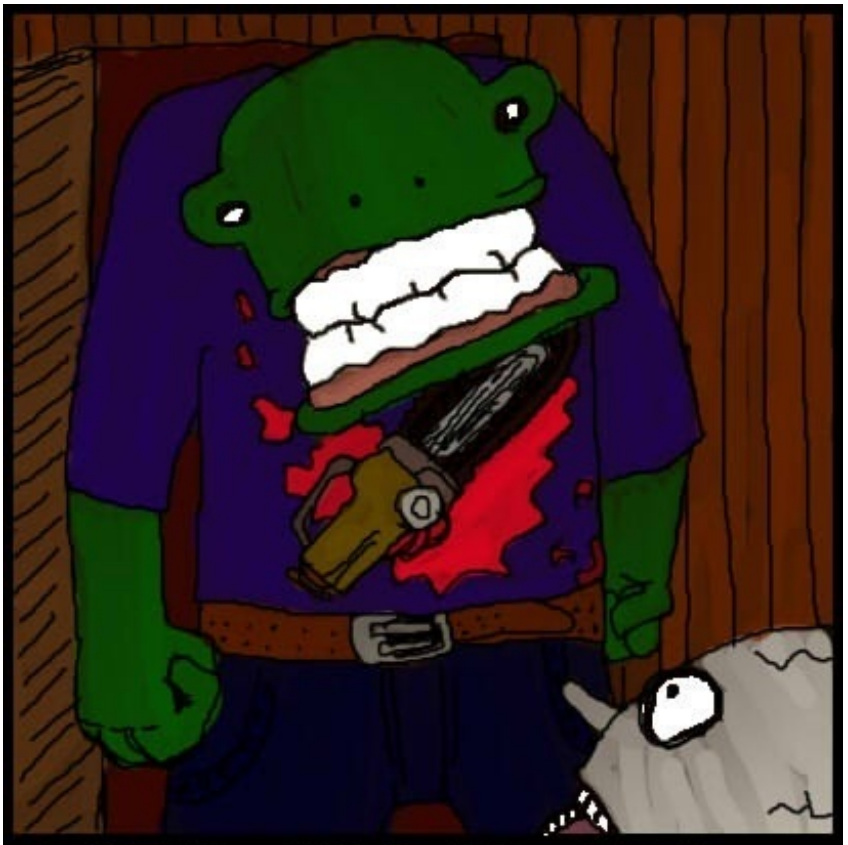
ピシ…

この音を、もう何度も聞いています。

そして少年は、今日もまた、いつものように
おじさんに仕事を頼まれてしまいました。
「おい、これ頼む」



今回は手紙を届ける仕事でした。
おじさんは、いつも何か仕事を引き受け、
それを少年に押し付けます。
本人は働きません。
だから、少年はおじさんが嫌いです。
今日、ますます嫌いになりました。



最初の手紙はカエルの大男ロギさん。手紙には

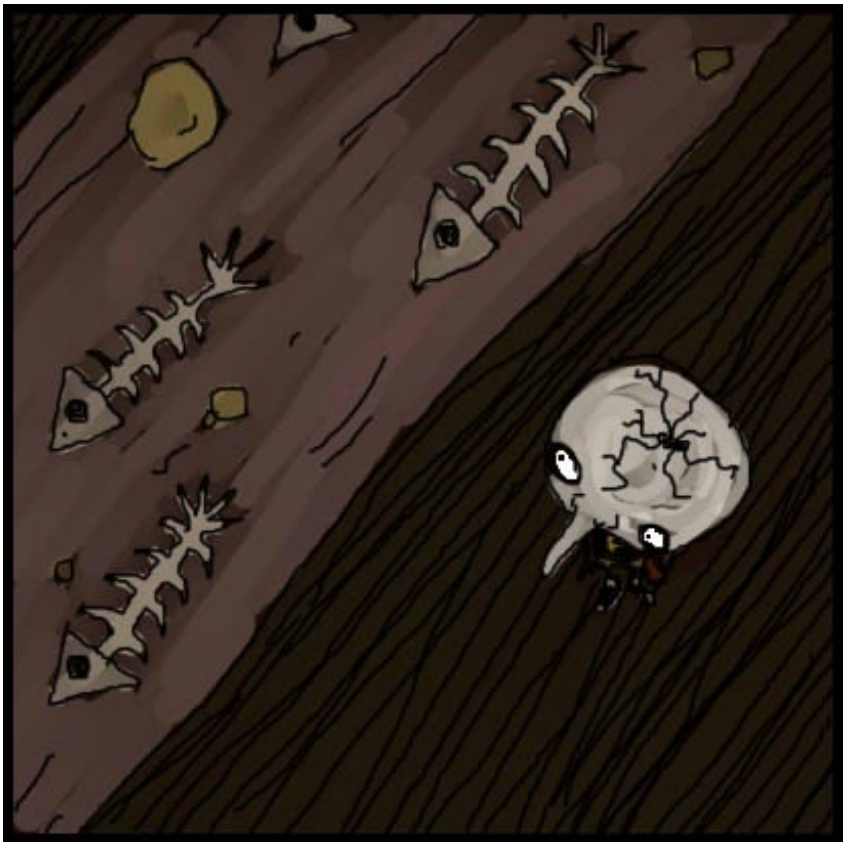
『もっともっと木が必要！

*　そこらの森の木 切り倒せ！』*

と、あるようです。

「いっちょやるか！」

自慢のチェーンソーを持って出かけて行きました。



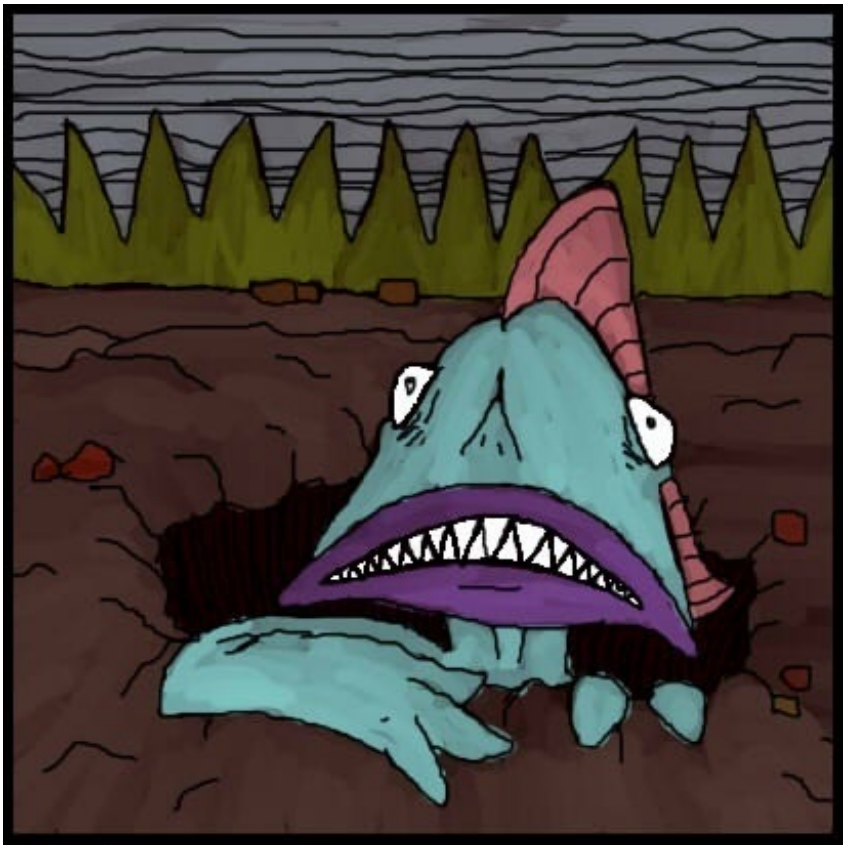
少年は次の手紙を届けるため、歩き出しました。
干からびた川の横を通り過ぎて

たどり着いたのは林の中。
大きな鳥のトキシーさんに手紙を渡しました。
『もっと強い毒が欲しい！材料集めて研究再開！』
と手紙に書いてあるようです。
「ツヨイ毒！スゴイ毒！イチコロ！」

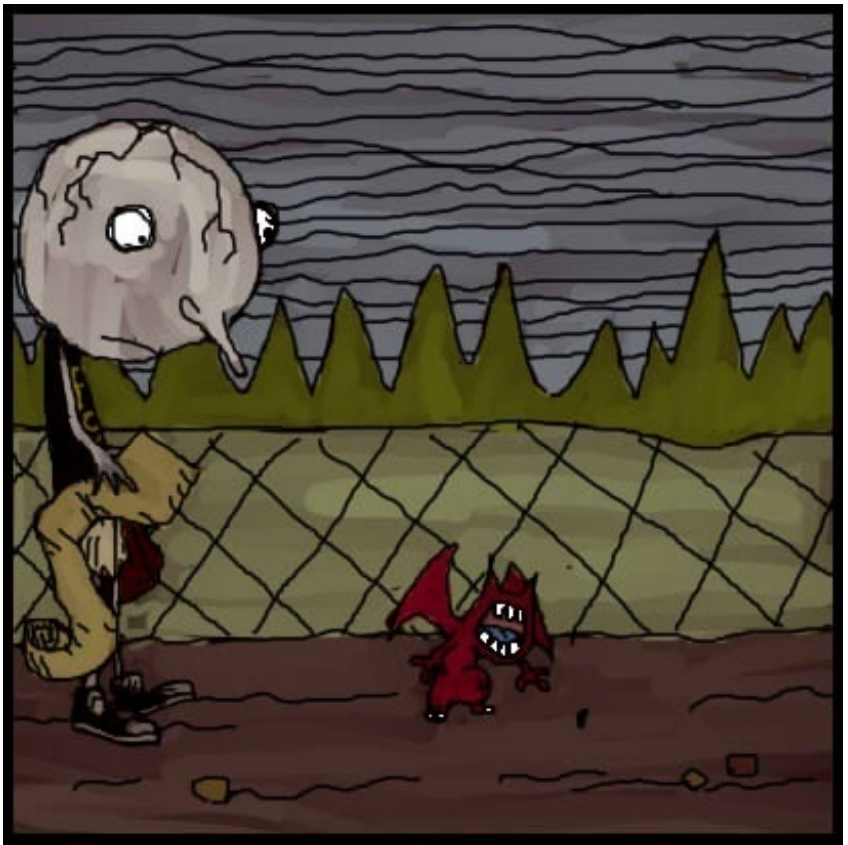
トキシーさんは、すぐさま飛び立ちました。
毒の研究のせいか、空は割れて穴だらけです。

次の届け先はこの畑。
どこかにウォンさんがいるはずです。
少し歩くと、地面に穴を見つけました。

なんだか声が聞こえてきます。
この中にいるのでしょうか。
声を掛けて出てきたのは半魚人。



けれどウォンさんではありませんでした。
半魚人のファムラさんは
「ウォンさんならきっと近くにいると思うよ。
　よーく目を凝らして捜してみな」
と言って、また潜っていきました。



しばらく畑を歩いていた少年は、ティンティニが
誰かを襲っているのを見つけたので追い払いました。

覆われていたのは小さな弾丸でした。

「助かった…ワタシはウォンという者だ。

　危ないところを助けていただき感謝する」

なんと、捜していたウォンさんです。

『お前の力は強力だ！使い方を考えろ！』

手紙を読んだウォンさんはどこかに消えていきました。

次はマルデルさん。
届け先は隣の街。
長い長い道のりです。

街を目前にして、一人の兵士に会いました。
何かから逃げてきたようです。
マルデルさんを知っているか聞きましたが、
怯えた様子でそのまま去っていきました。

街に入ると、解体虫のディーさんがいました。
「死体あさりかい？
　悪いが、もう全部バラしちまったよ。
　今回のは良い戦争だったね。
　山ほど死体が出たんだよ」
少年がマルデルさんのことを聞くと、広場の辺りで
見かけた人かもしれない、と教えてくれました。

広場には一人の老人がいました。
マルデルさんでした。
『今度の敵は手強いぞ！アレを使って皆殺し！
街にいる者 皆殺し！』
「忙しいねぇ…カカカ…」
マルデルさんは不気味に笑うと、
どこかへ消えていきました。

少年の郵便配達は続きます。

発明家の改造ペンギン、シーボさんに…

『氷発電まだなのか！？早く完成させてくれ！』

「もう完成してまっせ」

無くした尻尾を探して旅するトカゲのシェルチさんと…

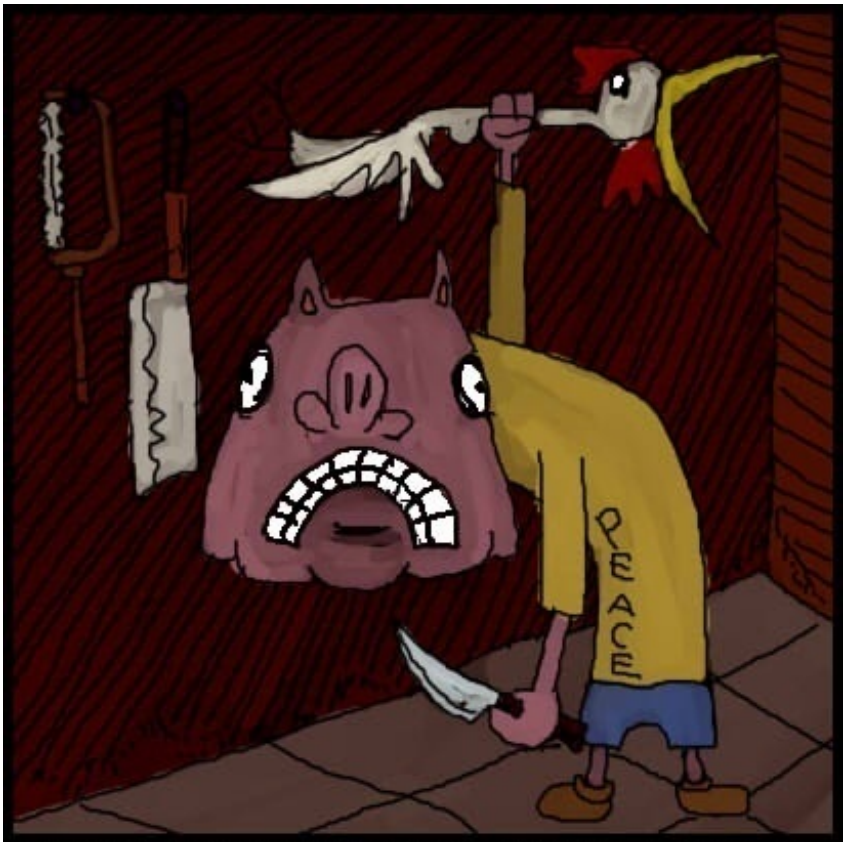
『尻尾を探して早十年…。それでも私、待ってます』

「おいら、この十年なにやってたんだろう…。
もっと大切なもの…近くにあったみたいだ」

パイナップルが大好きなアッシムレートさん。

『陛下！早くお戻りください！』

「パイナップルが栽培できるようになったらね～」



それから、養鶏場で働いているブタのウォルクさんや…

『緊急事態だ！チキンが足りない！

パーティー用に大至急！四十人前送ってほしい！』

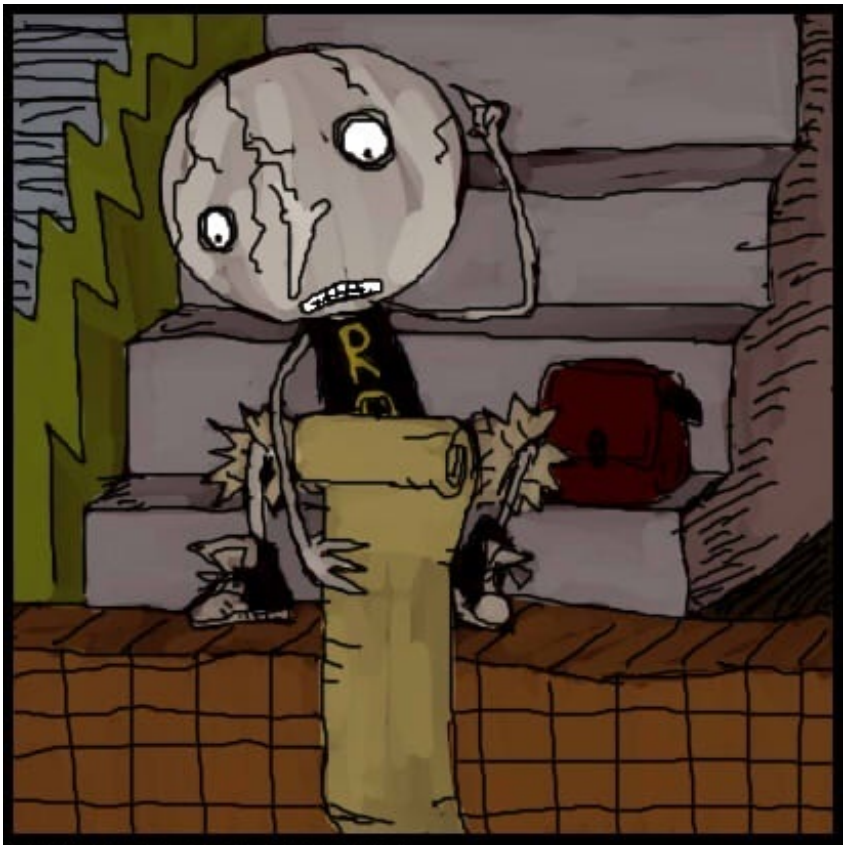
「……四十人前って…何羽…？」

いろんな人に手紙を届けました。

『我らの里も、もう危ない。
　戻って助けてもらえぬか？』

「小さな少年、手紙を届けてくれてありがとう」

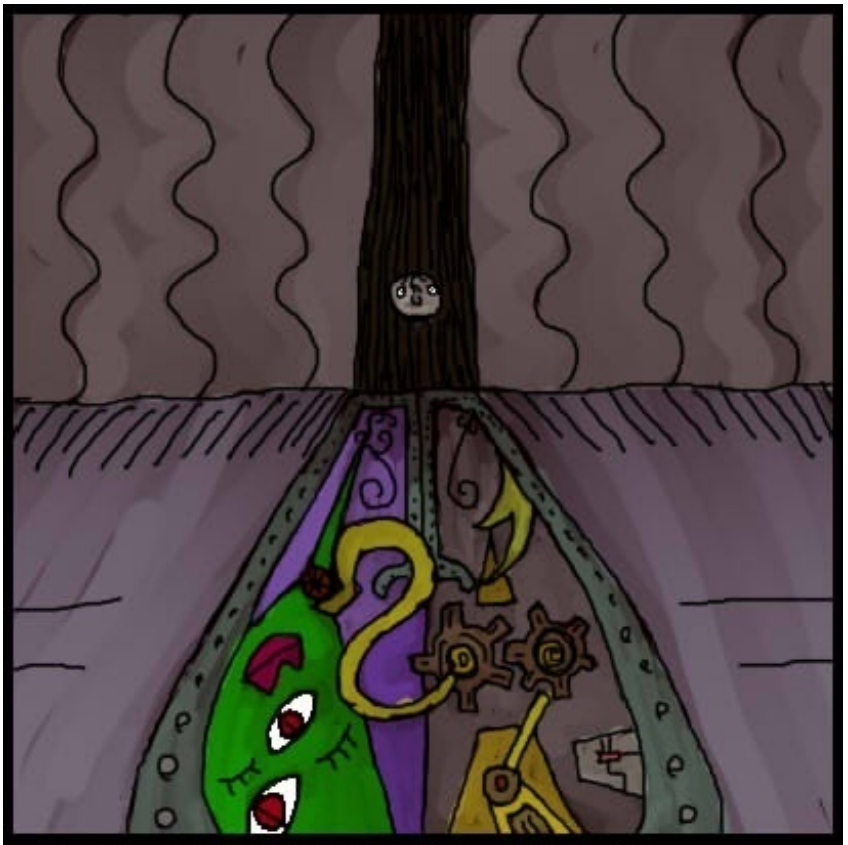
巨人のギートさんに届け終わって…



届け先リストを確認すると、
とうとうあと一件でした。
最後はまた別の街。
そこに住むフィリディさんです。
地図を確認すると、かなり遠い場所のようですが
この辺りでは一番立派な街だと聞きます。

途中、狩りから帰るネズミのレベージさんに
道を尋ねました。
「へへっ、こん先だわ。気いつけろや。
　あと、道から外れんなよ。地雷だらけなんよな」

どうやら街はもうすぐのようです。



街の入り口は大きな機械仕掛けの門でした。
レバーを引くと、ガチャンガチャン、と機械が動いて
門が開きました。

街の中は、炎の赤と熱で埋め尽くされていました。
大きなリクガメが甲羅も背負わずに暴れ回り、
応戦する街の戦車を捻り潰しています。
なんと街は戦争真っ只中だったのです。

少年はそーっと慎重にバレないように、燃え盛る街を
回り道して進んでいきます。
最後の手紙をフィリディさんに届けるために。

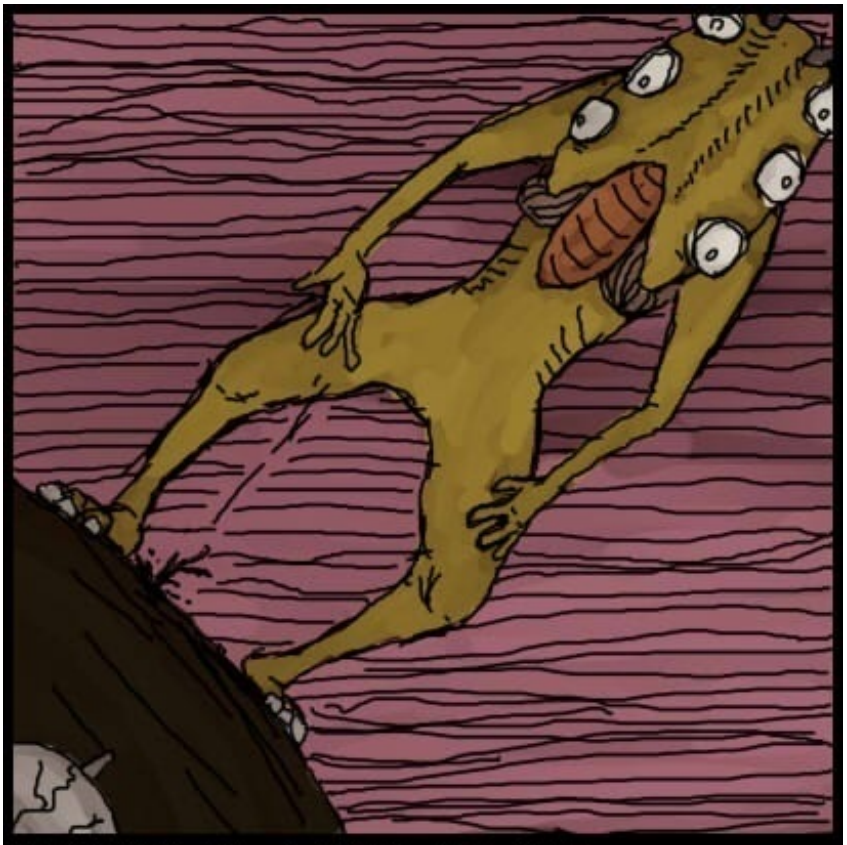
そして、ようやく見つけました。

フィリディさんは この街の兵隊のはずですが、
暗い小さな倉庫の中にいました。

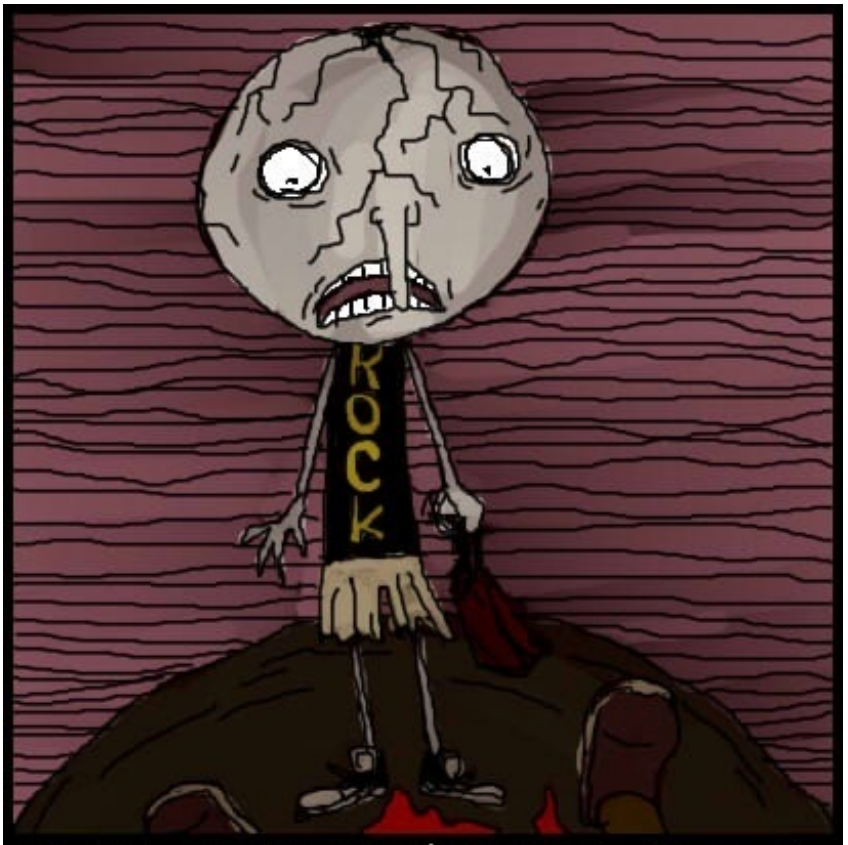
そこで うずくまっていました。

「死にたくない…死にたくない…」
少年が声を掛けると甲高い声をあげて驚きましたが、
すぐに落ち着きを取り戻しました。
『フィリディ、いつでも帰っておいで。
　つらくなったら帰っておいで』
フィリディさんは手紙を読み終わると、静かに泣いて
何かを悔いていました。

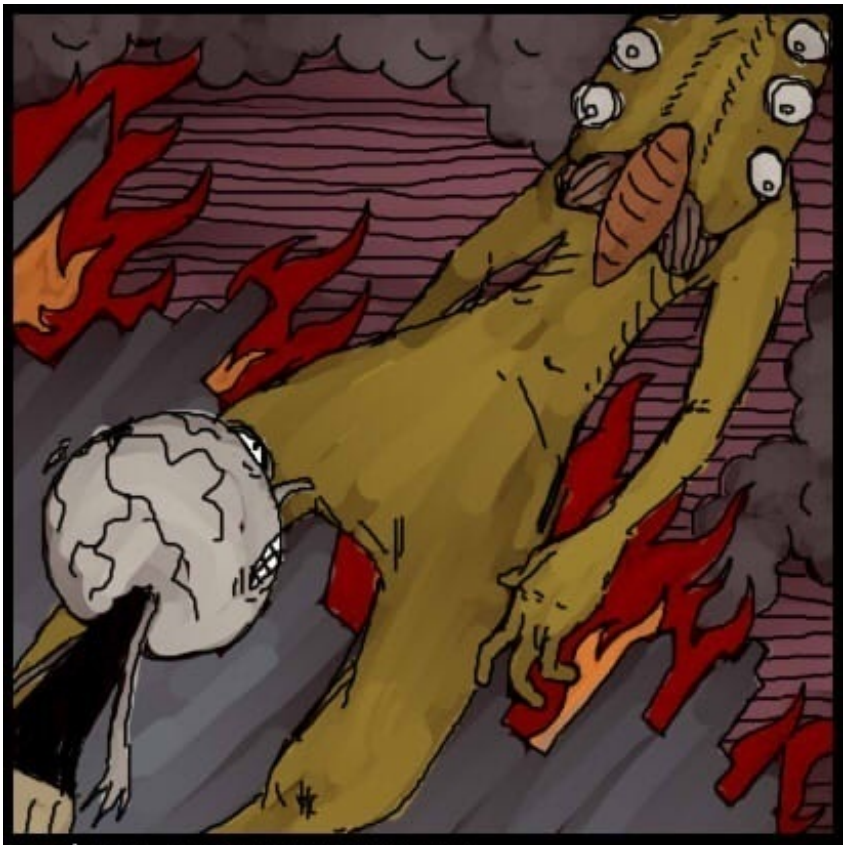
ベキ！！バキバキ！！！
物凄い音がして振り返ると、巨大な怪物が入り口を
破壊して、倉庫の中を覗き込んできています。
その姿に、フィリディさんの目から涙は消え、
口から声にならない恐怖が視れていました。
そして怪物は腕を伸ばして、喚くフィリディさんを
捕らえました。



恐怖で固まっていた少年は、さらわれる
フィリディさんを追って倉庫を飛び出しました。
倉庫の外で直立する巨大な怪物。その手から解放される
フィリディさんは、そのまま地面に落下して、叩きつけ
られて、頭から落ちたものだから、いろんなグチャグ
チャな音と同時に、首から上もグチャグチャで、少年は
その一瞬の出来事を目の当たりにしました。



そして今、目の前に誰だか分からなくなってしまった
人間が転がっています。



気づくと、怪物はいつの間にか、
少年のすぐ目の前にいました。

少年の体は恐怖で言うことを聞かず、
その場から動くことができません。

「おや…どこかで見た顔だねぇ…？」
そのとき、怪物の肩から、いつか手紙を届けた
マルデルさんが姿を現しました。
「あぁ～…手紙を届けてくれた少年かい…。
　こんなところに来なければ……悪いねぇ…」

マルデルさんが命令すると、怪物はその巨大な手で
少年を吹き飛ばしました。
少年の体は真っ直ぐ壁に向かって飛んでいき

そのひび割れた頭が

粉々に割れて

割れた頭からは、いろんなモノが飛び出して、
その全部が、怖いぐらいに真っ赤で

叫び声のような"赤"が拡がって

街を覆い尽くして

少年も怪物もマルデルさんも、
手紙を届けた人たちも、関係ない人たちも、
なにもかも、世界中が"赤"に飲み込まれて、
真っ赤になりました。

そして、その全部が安らかに真っ黒になって

次第に世界は真っ白になりました。

いつしか花が咲きました。

最後は、しおれて、枯れてしましました。

これが、一番最初の世界の話。
これでおしまい。

ひびわれ少年の郵便配達

http://p.booklog.jp/book/13220

著者：ニジェマス
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/samejin/profile

発行所：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/13220

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/13220